

あじさい幻想

はるかなる夢幻の闇の深みよりあふれ落ちる幻花、その雪片の森に埋まる聖黄金獅子のうねりくねる白蛇の薄紫の闇の中にしゅゆにして消え果てるたまゆらの生の幻影、聖なる猿神を森の葉裏に葬り、あふれてくる羊水の海の中に溺死する聖者たちのたまゆらの死の幻影、森の中の塔のように、やがては朽ち果てる死者たちの痛ましいまなざしを肌を感じながら移ろいゆく日々の中に眠るあじさい色の生者たち、樹木のかすかな囁きの中であえぐように日々を紡ぐ死者たちの嘆きをあじさいの花芯に感じながら、薄紫の闇の中に眠る生者たちのこぼれ落ちる束の間の闇の祝祭、花びらはいくえにも花びらをつくり葉裏はいくえにも群がり生は死をかえ死は生をはらみながら、森影にひっそりとうずくまる薄紫のあじさい、束の間の薄紫の闇の祝祭、やがては腐乱する薄紫の闇の祝祭、うずまくあじさいの海のかすかな波音を聞きながら、森は目覚め森は眠る、その淡い花の色にかす

江連 博

かな死のにおいをかぎながら、森影の路を行く人たちの爬虫類の笑い、ああ、はるかなるはるかなる夢幻の闇のきわみよりあふれ落ちる幻花の雪の、死の森に埋まる聖黄金獅子のたてがみの首すじに馬乗りになり生の森に旅立とうとする幼年のおれに降りしきる降りしきる雪片、森の闇に消えるのだろうか、森の果ての河床の闇に埋まるのだろうか、雪のにおいのようにはるか遠くかすかなるもの、生と死の織りなすところ、あふれてくるあふれてくる羊水の海の中に溺死する聖者たちのたまゆらの生と死の幻影、あじさいの淡い色の生と死の幻影、なつかしいなつかしい死の森のふちに、ただひたすらに縊死することを祈る幼年のおれの背に雪降り雪積もる、生と死を織りなして水無月の風に揺れている森影の薄紫のあじさい、優しい死の面輪を浮かべながらひっそりと揺れている白あじさい、今お前のそばにいるおれは紫色にまみれ傷ついた瀕死の獣のように森の闇の中にひっそりとうずくまっている、やがて、おれは一群れの紫色のあじさいとなり、またたくうちに死者たちのように腐乱してゆく。